

30年の物語

岸惠子

Kishi Keiko



講談社

の物語

岸 恵子

Kishi Keiko

江苏工业学院图书馆
藏书章



講談社

〈著者略歴〉

横浜生まれ。映画女優、作家。1957年、医学博士から映画監督になったイヴ・シャンピと結婚のため渡仏。以来パリ在住。夫から強い影響を受け、ジャーナリスト、作家として活躍の幅を広げる。主演女優賞をはじめ数多くの賞を受賞。96年から、国連人口基金親善大使。

〈映画〉「君の名は」「亡命記」「女の園」「怪談」「雪国」「おとうと」「約束」「細雪」など多数。

〈著書〉『巴里の空はあかね雲』（日本文芸大賞エッセイ賞受賞）『砂の界へ』『ペラルーシの林檎』（1994年日本エッセイスト・クラブ賞受賞）

N. D. C. 914 306p 20cm

ねん もの歌り
30年の物語

1999年11月15日 第1刷発行

著者 岸 恵子

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

電話 編集部 03-5395-3516

販売部 03-5395-3622

製作部 03-5395-3615

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります。

©Keiko Kishi 1999, Printed in Japan

お取り・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。

送料お取り担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは学芸局あてにお願い
いらられ。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外
をられ、禁じられています。

ISBN4-06-209700-1 （学芸局）

プロローグ

羽田空港からロンドンへ向けて発ったのは、一九五五年の大晦日。私はとても若く、はじめてのヨーロッパ一人で旅立つ、という当時にしては法外な冒険に興奮していた。

南回航路で日本からロンドンまで五十時間！

太陽と共にゆったりと、東から西へと移行するプロペラ機は、七つの国へ降り、七つの初日の出を見た。パリへ着いたときには、翌年の一月二日になっていた。

「風は知らない」という英国映画のヒロインに抜擢され、デヴィッド・リーン監督の要請で英語をマスターするため、四、五ヵ月間の留学生活を送る目的ではあったが、我儘^{わがまま}を言つてパリに二、三日の途中下車をした。

当時の若者の例に漏れず、私もレマルク著『凱旋門』に夢中だったのだ。

その日、パリには雪が降っていた。大きなぼたん雪だった。

日本に降る真つ白でふかふかとあたたかそうなぼたん雪ではなく、夕暮れの薄闇のせいか少し煤^{すす}けて悲し気だった。私はコンコルド広場に一人立ち、降り注ぐ雪の紗^{しや}がかかつて、はるかかなたに遠く、幻のように立つ凱旋門を仰ぎ見た。

その遠い幻に向かって私は歩きだした。

驚くほど幅の広いシャンゼリゼ大通りには、葉が落ちたあとの、黒々とした裸木が、さまざまな形のシュールな枝をひろげ、まるでベルナル・ビュッフェの絵のように立ち並んでいた。

それは美しいメランコリックな光景だった。

映画「凱旋門」の中で、シャルル・ボワイエ扮する亡命外科医が、美しいイングリッド・バーグマンとカルバドスを飲んだ居酒屋はどの辺^{へん}だったのだろう、と思いながら歩くうち、ぼたん雪は細雪^{ささめゆき}になり、ついにはみぞれとなった。

近くで見た凱旋門は低く垂れこめた灰色の雲の下で泣いているように見えたし、建立者であるナポレオンが、例の風変わりな帽子を被り、片手を軍服の胸に入れてあたりを睥睨^{へいげ}しているようにも見えた。

なんだかさびしいな、と思った。美しくて立派だけど、こんなさびしい街には住みたくないな、とも思った。

そのときから二年近く経ち、私はパリの住人となった。そして四十二年の歳月が流れた。これから読んでいただく十二の短編は、二、三のものを除いては、みんなパリが私の心に刻んだ物語である。なぜ『42年の物語』ではないのか……。心にわだかまる事件や人

物、その背後に見え隠れするそれぞれの時代の光りと影。それが刻んだ長い年月にわたって疼いた痛みやよろこびは、三十年ほど経つと、まるで潮が引くように、あるいは心変わった潮の流れが思い思いの方向へ散ってゆくように記憶の中を遠のいてゆく。消え去るのではなく、ある静かな風景として、あるいは、もう手を加えられたくはないある姿を作って心の中に沈殿する。だから『30年の物語』とした。

三十年経っても、まだしたたかに心の中を立ち退かないしこりがあるとしたら、それはもう物語ではなく、その人物が外に晒したくはない魂の在り処。それを書く日が私にやってくるだろうか……。

一九九九年十一月

岸 恵子

30年の物語 ● 目次

プロローグ

I

影絵の中のジャン・コクトオ

9

追悼 オマー・ジュ

19

輪舞の外で

39

ラスト・シーン

59

栗毛色シヤタンの髪の青年

79

「君はヴェトナムで、何も見なかった」

Tu n'as rien vu au Viêtname!

145

影を失くした男たち

171

女の不思議

185

女のはったり

199

遊覧船

231

夜を走る影

259

ホームレスと大統領

273

挿画 Delphine Ciampi
装幀 三村 淳

30 年の 物語

影絵の中のジャン・コクトオ

ちいさい頃の一時期、私は「影」に夢中になっていた。どこまでもついてくる影。

朝日を受けて道を歩き、くるっと振り向くと、影も、体からは遠い先っぽのほうにある頭がくるっとよじれる。うしろ向きになれば影は眼の前にいて、手を上げれば一緒に上げる。

真っ昼間の影はうんとちぢこまり、夕方になるとまた細く伸びてゆく。前になったり後になったりしてどこまでもついてくる。

雨が降ったり、月のない夜でないかぎり影はいつも私の真似をしている。

あれはもう一人の私なんだ、と思っていた。

影踏みごっこも好きだったし、壁や襖ふすまに指でキツネの影絵を作るのも好きだった。

それから、限りなく歳月は流れ、パリという街へ住む身となった私は、ある日胸をときめかせて、ジャン・コクトオさんのパリの仕事場のベルを押した。

秘書か、執事に出迎えられるものと思っていたら、ドアを大きく開け、片方の腕を翼のように拡げて私を抱きかかえるように招じ入れてくれたのは、灰色の作業衣を着た詩人その人だった。

なぜ、片方の腕だったのか……。もう一方の腕で詩人は、眼がキラキラと銀色に光る大

きなペルシャ猫を抱いていたのである。

抱き寄せられ、頬にやさしくキスをされて、私はいやおうなくペルシャ猫とドッキングする羽目になり思わずクッションとくしゃみをしてしまった。

私は猫がダメなのだ。

中学生のときにはじめて観た映画、「美女と野獣」以来の憧れの巨匠ジャン・コクトオに招かれて、天にも昇る気持ちなのに、あろうことが、挨拶もしないうちに立てつづけに四、五コのくしゃみをしてしまった。

詩人は、面白そうに笑って言った。

ブラヴォー・ア・ヴォ・スウェ
「Bravo, à Vos Souhais !」

フランスには、誰かがくしゃみをする、廻りの人たちは間髪（かんぱつ）を入れず、「ア・ヴォ・スウェ！」という習慣がある。

「あなたの願ひ事が叶いますように——」

言われた相手もまた、間髪（かんぱつ）を入れずに「ありがとう」と応（こた）える。私も次なるくしゃみの連波を押さえこむように慌てて言った。

「メルシィ」

そして言わずもがなのことを言ってしまった。

「猫がお好きなのですね」

「まあ見てください。この美しいばくの子供たちを」

通されたブチ・サロンには、なんと！ 艶やかなビロード張りのソファや長椅子キヤナベの上に、ビロードよりもつと艶やかな毛並のペルシャ猫が、五、六匹、いや十匹近くいただらうか。

それぞれが尊大に寝そべり、視線を、高くもない鼻の先から滑らせて闖入者である私を、品定めするかのようへいげいに睥睨した。

私は気分が悪くなった。立ちすくむ私に、詩人は一冊の本を手渡してくれた。

くしゃみのときの「スウェ」にひっかけるように、「私の願い事が、あなたによって叶かなえられることを信じています」

渡された本の題名は『影絵』であった。副題として「濡れ衣ぬれぎぬの妻」とある。

「二十三歳のときに書いた私の処女戯曲です。いろんな女優が主役を演じたいと申し入れてくれましたが、先日のパーティであなたの姿を見かけるまで、私は何十年間も上演を禁じてきました。二十三歳の私には、まだ生まれてもないあなたが、ちゃんときと見えていたんですよ」

いかにも詩人らしい、身にあまるクドキ文句だったが、私はためらった。私は根っから

の映画女優で、舞台を踏んだこともないし、舞台でお芝居をしたいなど大それたことを思ったことさえもなかったのだ。

「わたくし……舞台に立ったことはありません」

「あなたは立つのです。私が演出をします」

私は二十七、八歳だったろうか。おぼつかないフランス語で戸惑っている私に、詩人はずきに英語を交え、身振りを交えて語ってくれた。

時が経ちすぎている。私の記憶は曖昧だし、この時にいただいたサイン入りの初版本まで、なんたること！ 度重なる引っ越しで失くしてしまった。概要だけを憶えている。

「この物語は『影』が主役なのです。影に嫉妬する夫に濡れ衣を着せられて、海に身を投げるかなしい人妻のはなしです。中国の民話からヒントを得たのです……」

あなたは美しい影を持っています。パーティであなたの歩く姿や仕草を見て、マダム・ヌー（だったかスーだったか……）がいると思った……。

あなたの体にはキキユギヨウの血が流れています……」

「えッ？」

「歌舞伎はよく観るのでしょうか？」

「ア、いいえ……」

私の家庭には、子供を歌舞伎や文楽に連れて行ってくれる粹人はひとりもいなかったし、そんな時代でもなかった。

映画界に入ってから、自分の映画の完成試写を観る時間さえないほどの、かけ持ちに次ぐかけ持ち撮影の日々だった。

私の歌舞伎初体験は、来日され、私を「風は知らない」という英国映画の主演に選んでくださったデヴィッド・リーン監督のお相伴で実現したのだった。

そして、これもまたあろうことか、「娘道成寺」を鑑賞しながら、私は世界の大監督の肩に寄りかかってすーすーと眠ってしまったのだった。

誤解されないよう弁明すると、その後、鑑賞するチャンスがあった「俊寛」など一連の時代物には心を締めつけられ、私が根っからの日本伝統芸能に無知無感動の野暮娘でないことを知って、私自身が安堵したものだ。

「影は、ここです。魂です……」

とコクトオさんはつづけた。

「顔で表現をせず、体全体で感情を表現します。それが影絵となって、舞台のうしろに大きく揺れ動くのです。踊りのような、パントマイムのような動きです。せりふはすべて韻を踏んで、ゆっくりとうたうように……」